

経済成長一辺倒が地球を滅ぼす (前編)

農食健研究所
(株)医工学研究所
(株)人間と科学の研究所 所長

飛岡 健

〈はじめに〉

これ以上の物質と

エネルギーの使用料増加は？

う：程度のレベルである。

今この地球上で何が最大の問題なのだろうか？それは環境問題だ。これだけ環境問題が厳しくなり、異常気象による自然災害が今世界的に拡大している。それなのに、この地球上の住人は、何ら抜本的な思慮をすることは無い。それどころか、更に生態系の破壊に邁進しているのだ。もち論、対処療法的に2050年までに、CO₂排出をゼロにするとか、出来る限り循環型の経済とか、SDGsとか、持続可能な活動を展開していくとかの目前の働きは、対処療法的にはしているが、何らこれから訪れるであろう地球上での人類の生存の危機に対して、抜本的な配慮をするのではなく「何とか目の先の危機を乗り切ろう」との程度の話に終始しているのである。未来に対し、絶対的に我々の棲家としての地球を守るとの決意の下での対応ではなく、何とか少しでもこれからの危機に対して申し訳程度に努力しておこ

う：程度の良いのであろうが、地球上での人類の存続を考えた時、それでは明らかに不十分である。その程度では、何ら根本的な解決をもたらしてくるレベルの努力とは言えない。それ故、地球上での人類の存続は極めて重大な危機へ向かう可能性を秘めている。何よりも今日の地球での人類に対して、「これ以上地球のガンとして自己増殖をしないでくれ」と我々の生存自体の問題として地球から、厳しく問われているのである。いや悲鳴が聞こえてきているのだ！その悲鳴は、大多数の人間の可聴周波数帯から外れているので、人間の理性、あるいは知性という機能のゲインを挙げて、その声を聞かねばならないのだが、現実の地球社会を眺めると、明らかにそうした努力どころか、人類社会は物質エネルギーの消費を抑制するどころか、まだ経済を今以上に向上させる為に、物質とエネルギーの消費を更に増やそうとしている。それはもって環境を破壊していくのと同義語なのだ。何故、人類はこれほどまでに馬鹿なのであ



経済成長一辺倒が地球を滅ぼす

ろうか？

我々人類は、自らの自制が効かない状態を深く反省して、この自らの生存の母体である地球に対して、ガンの存在としての立場を放棄して、何とか生存し続けられる状態を模索し、描き出さねばならない。まず自然に「御免なさい。増長してしました。これから気を付けます」と謝り、許しを請い、その上で「失うべきものは失って、自らの将来の生存を自然との密接な関わりの中で共生的に安定なものにしなければならぬ」。

明らかに、ここでは何を加えて成長するかではなく、何を失い成長するかのかの「引き算型成長論」が求められている。

しかし、この地球上の殆どの国々の指導者達は、引き算どころか、更なる足し算をするべく、いかに自国を今より経済的に発展させるかを中心に考えている。その事に対しては、自国民へ、あるいは世界に向けて「環境を一生懸命考えていますよ」というポーズを言い訳程度にしているだけで、世界が同時に対応せねばならない環境問題に対して、抜本的に取

り組むどころか、何とかもつと経済を成長させようと必死である。それは一見すると成長に向けて努力しているのだから、望ましいように映るが、今のままの産業構造の元での経済成長は、否が応でも、物質とエネルギーを多量に消費せざるを得ない状態になっていくので、それ故に、経済発展を求める限り、その拡大は続き、地球の自然環境を更に悪くし、結果的に人類と生存環境としての地球そのものに最悪の災禍が及ぶように尽力してしまっている事になっているのだ。

だが、繰り返すが未だ人類はSDGs (Sustainable Development Goals) という形で、Development Goals) という形で、Development Goal tainable」という形容詞が付いているが、今日の状況においては、Developmentとの間に「形容矛盾」が生じていることに気付かねばならない。そして世界中がこのSDGsなるスローガンに踊らされて、胸にバッチを付け、誇らしげに胸を張って歩いている人の何と多い事か！

既に、歴史学会においても、人類の歴史はDevelopmentではなく、Unfoldingと解釈しようとの動きがあり、人類の歴史は一方向な進歩としての発展ではなく、円環的なだと理解しようとしている。実際そうした意識変革を地球全体として、早急にもたせねばならない。

さて本論において、著者が描き出したのは、どのような物質、エネルギーをこれ以上消費をしない、いや出来れば、減少させる形での人類の地球上での生存方法が考え得るのかの挑戦なのである。おそらく内容としては、SFに近いものとして受け取られることになるだろう。しかし、それ位の事をしないと人類の将来は危うい今日の状態になっているのだ。

1. 人類存続という言葉の意味の確定

まず思いのまま「人類存続」なる言葉から考えられるシナリオを挙げてみる。

- ① 今の人口を人為的に、人を殺すことなく存続を図る
 - ② 人類の一部でも、何らかの形で残り、未来に新しい地球を再興する
 - ③ いったん人類は全滅しても、ある時間の経過後再登場して人類の歴史を再開する
- etc.

さて、ここでこの論を展開するにあたっての第1の前提となる認識を共有しておこう。それは「既に、人類の存続の為の施策は、時間との勝負になっていく」という認識である。別に言えば「時間のかかる施策は採用出来ない」ということである。

その前提と共に、第2の前提は人類による直接的な人を殺める形は、人間社会の理としての倫理観から許可しない事を共有認識とする事、その上で、本論を展開していく。そうなる④以外のシナリオを採用する訳にはいかなくなる。

何故なら③のシナリオは、地球上での人類の存続のいちばん安易なシナリオであるし、前提となる2つの

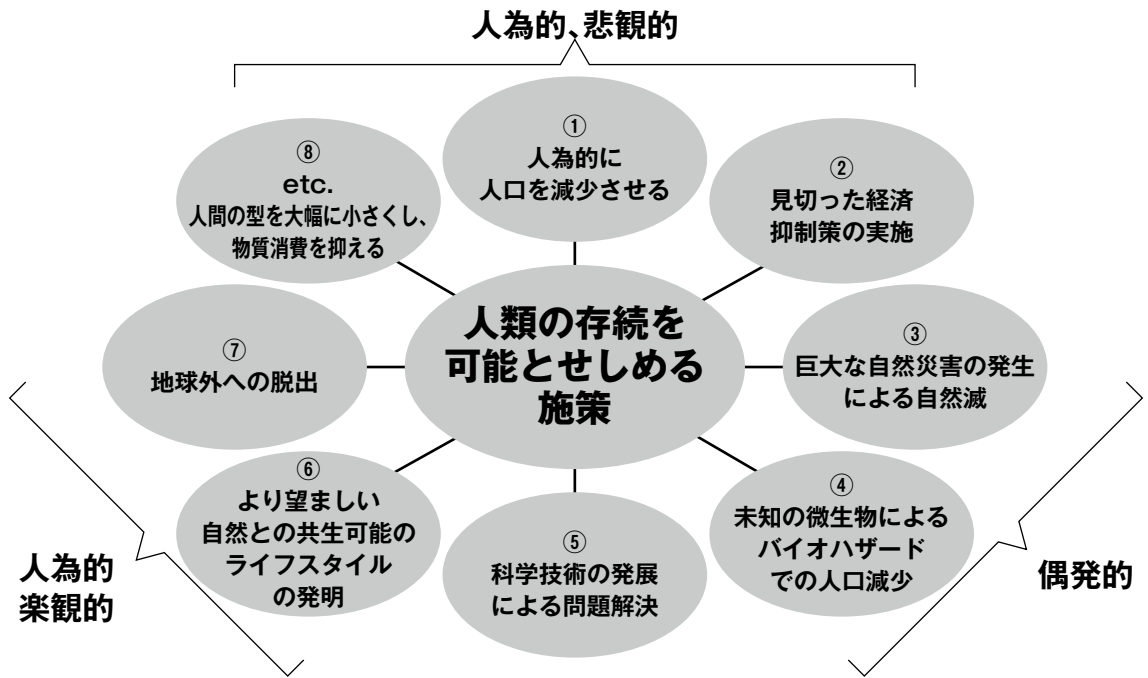


図1 人類の存続を可能とせしめる施策

認識をバイオレトするからである。まずここでもう一度、人類を存続させる為の可能性のある施策を列挙してみよう。

これら8つのシナリオと2つの前提のもとに考えても、やはり我々は、可能性は薄くとも①のシナリオを追求するべきである。②のシナリオは、『聖書』の「ノアの箱舟」の話と同じで、「洪水」か、それ以外の方法で、問題のある人達(?)を置き残して、箱舟に乗った人々が、新たな地を求めて出港し、今一度人類の活動を再興するという、まさにエスカトンの後の神の救済の話の如くである。しかし沢山の人を死に追いやるシナリオはここからは先ず外しておきたい。

①に関しては、②よりも、もっと厳しいシナリオで、一端人類が絶滅して、将来のどこかで、再登場して来るという内容である。比較文学学会原田元会長は、それが5000万年に地質学的研究から可能性があると語っている。この話には、地球の寿命の後44億年を考えると、一抹の希望を与えてくれるが、少なくともここしばらくのセンチュリー

(100年)、ミレニアム(1000年)の話ではない。それ故、ここでの論考から外すことにする。

さて次に③であるが、今のところ全否定する訳にはいかないが、今の私の能力では、イメージする事が出来ないのも、これも不採用である。結局残るのは、④のシナリオ案である。今の人口を人間が人間を殺す事なく生存させ続ける施策を、図1の中から考えていく事である。もち論その中には、人間自身が手を下さないが偶然に地球上の人口が減少させられる可能性を否定していない。

最近『レジリエンスの時代 Reimagining Existence on a Rewilding Earth』(ジェレミー・リフキン著)という本が出版され「地球に迫る大量絶滅の危機、強欲なる資本主義文明は終焉」という私の考え方に極めて近い本の内容であり、資本主義も代議制民主主義もマナ板の上に乗っている。そして2つの工業革命が「人類絶滅の道」を用意したと指摘している。詳しい内容は、そちらに譲るとして、私がここで展開している内容と似ているが、そこ



経済成長一辺倒が地球を滅ぼす

では、果たして人類の存続の為の改革に対して、何処まで人類社会のレジリエンスがあるかを語っている。以下では私の考えを展開していく。

2. 人為的に人口減少を 行う方法

おそらく、過去、現在、未来を通して、地球上の人類の人口を、人を殺して減らし、残った人達が幸せに生きていこうという考えをする人達はいたし、将来的にも必ず現れることになるだろう。

過去においては、イルミナティのユダヤ人の選民思想から生まれた「ユダヤ帝国の建設」がそうであった。そして今日においても「コロナとワクチンの利用による人口減計画」説の登場、更には「イスラエルによるパレスチナ人のハマス撲滅戦争による、ガザ地区の完全支配計画」が実行されている。

おそらく、これから将来にかけて、意図的な人殺しによる地球上の人類の人口の減少のシナリオは、より強く浮上して来る可能性が高いものと判断せざるを得ないのだ。何と悲し

い事であろうか！

それにも拘わらず、今日のこの地球上の一般大衆、いや指導者の多くも、日々の生活や仕事に忙しく、自分達の将来の事を考える余裕が無く、今のまま生きていけるとの予想の下に、日々黙々と日々努力をしているだけである。

まさに「赤信号、皆で渡れば怖くない」のスローガンの如く、「環境問題、皆で語れば怖くない」、あるいは「死ぬ時は一緒」の『三国志』のセリフの如く考え、「何とか人類の知らない出来事が棚ぼた的に訪れてくれ、人類は助かるよ」との無責任な楽観的希望の下に生きている。

従って当然ながら、ここでの考察に余り関心を示さないであろう。その意味で「杞憂の書」となる可能性は高い。

しかしホモサピエンスとして脳を使って生きている人類の中には、その視界の先に、このままでは地球で人類の生活が減んでしまう可能性が確実に見えている人もいる。それからの救済を実行しようとする人々は出続けるであろう。それはなかなか成功しないと考えがちである

が、より厳しい生存環境になった時、もっと効果的な方法で、それがなされる可能性は否定出来ないのだ！人類全体としての、自らの生存の条件に早く気付いて、動き出して欲しいのだが。

3. 人類の生存の危機を もたらず要因と生存の 可能性の模索

何よりも今日の人類の将来的生存の危うさの原因は、ほぼ次の順になるだろう。

- 1 環境問題の悪化
(原因は目に見えないが、結果は見え始めている)
- 2 バイオパンデミックの発生
(視界に入りにくい)
- 3 AIの支配と核戦争
(技術的には即応用化、しかし人倫が抑制している)
- 4 自然災害
(気候変動、火山の爆発、地震、大津波、etc.)
- 5 etc.

3-1 環境問題の悪化

この中でもトップの環境問題が焦眉の課題である。それにも拘わらず、人類はそれに対しての有効な動きを形成出来ないし、トランプ元大統領のように、それを否定するグループすらいる。確かに環境問題の認識は難しい。その原因は、ひとりひとりの感覚では捉える事は難しいからである。日々何気なく生活している事の中で生まれる負の要因の蓄積により生じているので、感覚では捉えられず、理性的に洞察して初めて判る事である。但し、間接的には、異常気象や、それに起因する森林火災、大雨や洪水、地崩れ等々から類推することは出来る。ただ公害問題と違い、その因果を立証する事はなかなか大変な作業であるので、多くの人々は何となく不安を感じていて、直接的な対処行動に出るケースは少ない。と同時に未だ環境問題の存在自体を否定するグループも、あって甘受するグループもいる。しかし前述の『レジリエンスの時代』の著者、ジェレミー・リフキンの語る如く、「人間の仕打ちに対して、自

然は再び野生化して (Rewilding Earth)、自然災害を激しく生じ、人類を滅ぼす程になるであろう」との指摘は正しいと私は判断している。それ故に「バベルの塔の建設」の話しを良く持ち出し、いずれ高くなり、神へ接近し過ぎるゝ神の怒りを買ひ、その塔は壊される話しを持ち出す、それに反応する人々は少ないのが現実である。

3-2 スペイン風邪以上のパンデミックの発生

ひよつとすると、これがいちばんの人口削減策と結果としてなつてしまふ可能性が高い。何らかの殺人ウイルスによるパンデミックの、意図せずの出現なのではないだろうか？ その可能性は次の3つの状況を通して生じるかも知れない。

- 1 人間と物の移動量と範囲の拡大と共に、人間社会に拡大
- 2 環境問題に伴う、地形の破壊による隠れ菌の出現
- 3 人間自身のDNA操作による殺人菌の開発、あるいは事故

4 et c. による拡散

第1は、第2次産業革命以降、指数関数的に増加している世界の人口、GDP、そして輸送量により、人類が、未開の空間 (ジャンゲル、洞窟、地下等々) に入り込み、そこで僅かの人間が接触して持ち出した菌が一気に沢山の人類が住む都会で動き回り、即ち繁殖の培地を得て、一気に繁殖して、かつてのスペイン風邪の如く、パンデミックとなり、地球上の数十%以上の人を死に至らしめてしまうケースである。それ故、人口が激減する。これは既に一部現実に、エイズ菌のように規模は小さいが出回っているし、更なる菌の出現が視界の中に入ってきている。コロナもその先駆けの1つとして捉える事が出来るのかも知れない。最大の問題は、ウイルスの宿主であった土壌中のバクテリアを農薬等で大きく減らしてしまった事にある。

第2は、人間の移動や物の動きとは違い、自然現象として生じるケースである。例えば温暖化の強まりにのり、激しくなる線状降水帯が、

今日観察されている。瞬間降雨量130mm/時を超えて、更に激しくなり200mm/時近くになると、多くの今日の地球表面で形状を保っている今の地形が、その姿を崩し、今まで長い間地下に静かに眠っていたものが、突然地表面に露出して、悪さをするケースである。シベリアで水河が融け、炭素菌が露出し、数人が死んだケースがその一例である。そうしたケースが降雨量の増加に付

けて、地形の形状保持が出来ずに眠れる菌や、秘かに地中深くにおいて生存していた菌と一気に地表面に登場し、それに触れた人間を傷つけ、更に凄惨な勢いで繁殖していき、人を壊滅的に死に至らしめるケースである。

地球の半径は6370kmであるが、この地球の地表面の厚さは、いちばん高い山が1万メートル (エベレスト山) 程度であり、深い海も1~2万mであり、精々合わせて十数kmに過ぎない。しかも菌の眠っている土壌の厚さは、全世界平均僅か18センチに過ぎないのだ。その土壌の中に眠っていた菌が大雨等により、流され、表出してくることは極めて

容易な事である。人類は自分達が、地球という風船の外膜の上に生活している事を自覚する必要があるのだ。そしてその原因が環境破壊による温暖化である事を強く認識する事である。

第3のケースは、既に今日一部流れている、人間を殺す菌やワクチンの人間自身による開発、それも一見すると、まともな医療活動をしているかの如き場面で、しかも常識的な形で、その菌を用いて人口減を図るスタイルである。既にそうした菌は、人類の歴史の中で、世界各地で開発されており、人道上禁止されているだけで、悪の支配者の中にこれを活用しようと考える者が登場すると、極めて簡単に実施されてしまう可能性が高いのである。

いずれにしても、この3つの可能性は、それが現実となる度合いは年々確実に人類社会の中で高まっている。その事に強い懸念を抱くのであるが、その度合いは、人類社会を見渡しても下る方向に向かう傾向が見つかからないのである。むしろ3つの可能性が共に高まっているのが今日と言えるだろう。



経済成長一辺倒が地球を滅ぼす

欧米
日本

台湾	VS	中国
韓国	VS	北朝鮮
ウクライナ	VS	ロシア
インド	VS	パキスタン
イスラエル	VS	パレスチナ 中東
サウジアラビア	VS	イラン
etc.(テロリスト集団の小型核兵器の入手と使用)		

中露

図2 欧米VS中露の覇権争い

何よりも、欧米VS中露の覇権争いは、グローバルサウスを加えて厳しくなり、世界各地で激しい武力闘争がなされており、両陣営が消耗していく状況になると、結果として、

何よりも、欧米VS中露の覇権争いは、グローバルサウスを加えて厳しくなり、世界各地で激しい武力闘争がなされており、両陣営が消耗していく状況になると、結果として、

何よりも、欧米VS中露の覇権争いは、グローバルサウスを加えて厳しくなり、世界各地で激しい武力闘争がなされており、両陣営が消耗していく状況になると、結果として、

何よりも、欧米VS中露の覇権争いは、グローバルサウスを加えて厳しくなり、世界各地で激しい武力闘争がなされており、両陣営が消耗していく状況になると、結果として、

3-3 AIの支配が強まり、AIにより世界を覆う核が用いられ、凄じい人口削減が生じる

核兵器の使用に至る可能性の高いところが下記に示した如く数ヶ所生まれている。

右記の全てが、核の使用の容易さと、逆にその被害を止める事が難しくなる事を暗示している。特に現在の核保有国9カ国(米、英、仏、中、露、インド、パキスタン、イスラエル、北朝鮮)に加え、その気になればイランをはじめ、核兵器の製造が出来る国が増えていると同時に、テロリストの核の入手の関門が低くなりつつあるのが、気になるところである。と同時に最近、イスラエルが核の利用をほのめかしたり、ロシアからウクライナに対しての使用を恫喝に用いたり、北朝鮮もアメリカに

右記の全てが、核の使用の容易さと、逆にその被害を止める事が難しくなる事を暗示している。特に現在の核保有国9カ国(米、英、仏、中、露、インド、パキスタン、イスラエル、北朝鮮)に加え、その気になればイランをはじめ、核兵器の製造が出来る国が増えていると同時に、テロリストの核の入手の関門が低くなりつつあるのが、気になるところである。と同時に最近、イスラエルが核の利用をほのめかしたり、ロシアからウクライナに対しての使用を恫喝に用いたり、北朝鮮もアメリカに

- 1 核の小型化
- 2 核の多弾頭化
- 3 発射場所の隠蔽化
- 4 ICBMの潜水艦、地上発射システムの性能の強化
- 5 etc.

核兵器の使用に至る可能性の高いところが下記に示した如く数ヶ所生まれている。そして注目せねばならないのは、次の核に関連する技術進歩である。

今のところ、あくまでも相手に対しての威嚇としていたる程度であるが、近い将来、何かのきっかけで核使用がなされる可能性は否定出来ないところまで来ているように思えるのである。

今のところ、あくまでも相手に対しての威嚇としていたる程度であるが、近い将来、何かのきっかけで核使用がなされる可能性は否定出来ないところまで来ているように思えるのである。

今のところ、あくまでも相手に対しての威嚇としていたる程度であるが、近い将来、何かのきっかけで核使用がなされる可能性は否定出来ないところまで来ているように思えるのである。

今のところ、あくまでも相手に対しての威嚇としていたる程度であるが、近い将来、何かのきっかけで核使用がなされる可能性は否定出来ないところまで来ているように思えるのである。

今のところ、あくまでも相手に対しての威嚇としていたる程度であるが、近い将来、何かのきっかけで核使用がなされる可能性は否定出来ないところまで来ているように思えるのである。

いると、手塚治虫氏の描いた『火の鳥』2巻の光景に現実味を覚えてしまっているのである。

3-4 巨大な自然災害の発生により、自動的に人口減少が生じるケース

それでは、仮に将来的に人類の大事を減らすような巨大な自然災害が発生し、人の手を煩わせずに、人口減少が達成されると考える事はいかなるものか。それを次に考えてみよう。今のまま人類が物質の大量生産、大量輸送、大量消費、大量廃棄を続けるならば、2050年にCO₂の排出量をゼロにしても、それまでに人類の産業活動によって痛めつけられた自然は、今以上に変調をきたし、とんでもない想像を絶する自然災害を招く事になる可能性を有している。CO₂の大気中の含有量は、窒素、酸素が主体の中で、0.03%に過ぎない。この値が僅か0.04~0.05%になるだけで、地上の生物の多くは死滅する。何とも脆い条件の中で、地球上の生命は、その存続を叫んでいるのである。環境破壊のツケの

1つは、既に言われて久しい異常気象である。それがより厳しくなってきたり襲ってくる事である。そして2次災害、それも巨大な2次災害の発生である。

少なくとも、今まで我々は、公害問題で臨時規制のみでなく、総量規制を廃水や汚水にかけてきたのと同様に、環境問題に關しても総量規制をかけ、(ex. 2050年まで、温度の上昇を1.5℃に抑制)、その為瞬間規制として、2050年までにCO₂の排出量をゼロにすることなっている。

3-4-1 公害問題から環境問題へ

しかし、公害問題と環境問題とは「疑わしきは罰せず」の原因が科学的に明らかになってから判決を下す実定法としての公害法に対し、「疑わしきは罰する」の予防法としての科学以外の考え方の入った環境法とは明確な違いがある。何がその差異を生んでいるのかと言え、公害は発生源を個別に追及出来るが、環境問題は地球上の生存全てが何らかの

形で関与しているものであり、その発生源を特定するのは難しいからである。その因果関係の立証も難しい。人間ひとりひとりのCO₂排出を始め、牛を始めとする動物のゲップも全て関与するのである。

しかしひとりひとりのこれらの状況への気付きは極めて難しい。という事はおそらく、人類の今までの物質的消費の状態の継続は続くことになる可能性が高い。そうすると、マウイ島の山火事や、リビアの大洪水の如き事例は加速度的に増加していく事になるであろう。これはそれらの国の事情のみが原因でないのである。仮に中国の三峡ダムがリビアのように破壊したとすると、下流の大都市上海をはじめ、大洪水になり、何十万、何百万の人間が直接的に死を迎える事になるであろう。

更に降雨量の増量がより厳しいものになる。その原因は温暖化により、海水温の上昇により、水蒸気の発生が雲の量を大幅に増加させるので、低気圧や台風が今までのように強まるだけでなく、新たに今の線状降水帯がもつと大規模に、かつもつと頻繁に生じる事になるであろう。

そうなると洪水の1次被害としての生存環境の直接的破壊や人の死亡に加え、2次災害として、衛生状態の悪化や耕作作業の悪化により、疾病の巨大発生や昆虫の異常発生等々により、大規模な食糧危機の到来、そして更に第3次被害として、飢えからの戦争が生じる可能性も大幅に高まる事になるであろう。空想ではなく、現実とその事が近づいているのだ。

そして前述の如く現在の普通に見られる地形(今までの降水量に対応出来ているに過ぎない)そのものの大規模な崩壊による今までは考えられない位の被害と、土中菌の中に人類の経験した事の無い疫病を発生させる細菌の露出の可能性等も想定される出来事である。スペイン風邪以上の大パンデミックが発生する可能性がある。その予兆は小規模であるが、既に出始めているのだ。こうした形で、地球上の人口が、一気に大幅に減少する。これならば人が人を殺すわけではないので、容認するとか、しないとかの話ではなく、そうした事態が万人の望みとは関係なく生じる可能性が整いつつあるの



経済成長一辺倒が地球を滅ぼす

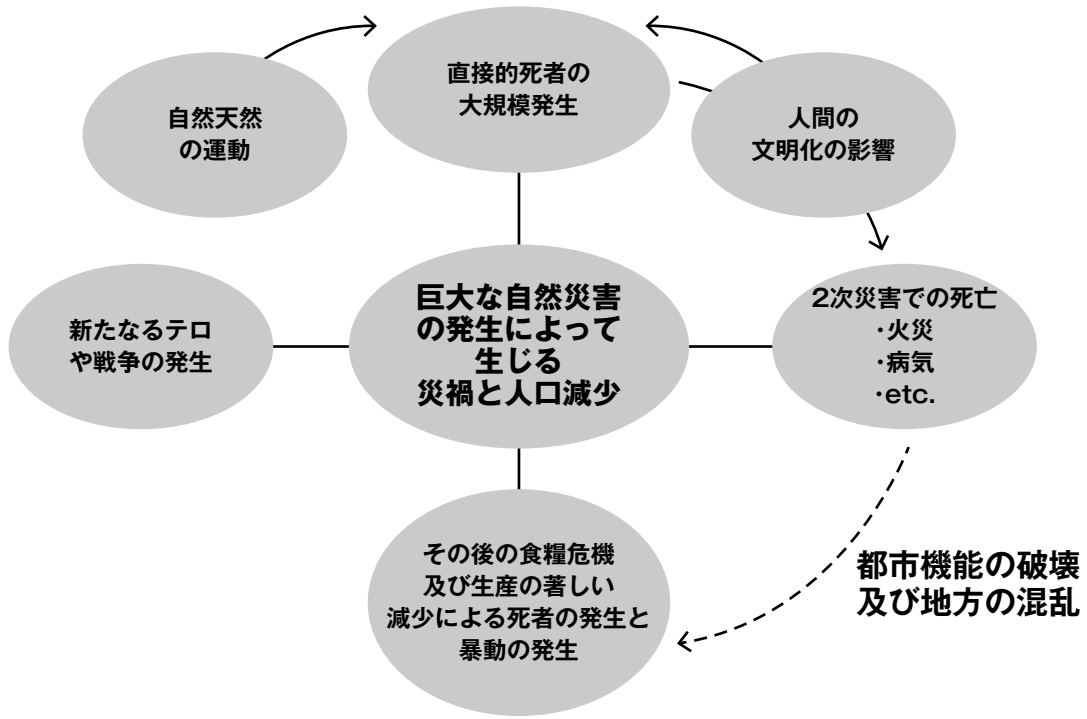


図3 巨大な自然災害の発生によって生じる災禍と人口減少

だ。

3-4-2 リビアの大洪水を1つの参考例として

2023年9月15日

環境破壊による異常気象のもたらした被害の例を見ておこう。

リビアの地中海に面した都市デルナで激しい降雨により、上流の2つのダムが決壊し、折からの河川の白骨化に近い状況で堤防も整備されない状況は、同市を壊滅的な状況に陥れた。人口約2万人の都市で、市長は2万人以上の死者が出るであろうとの予測を発表している。他からの事情で生存している人々を計算しないとほぼ全滅ということになる。

何よりも直接的に死に至った1次被害者に加え、国状が乱れていたのだ。それ故生活環境の整備が十分になされていなかったのだ。それ故インフラの破壊により、電気水道、そして道路や交通手段をも破壊され、医療行為も、重機による救済も出来ず、しかも衣食住全てが不足し、地域は死者を含め、悪臭が立ち込め、感染症が伝播し、まさに生き地獄の

様相を示していた。何が被害を大きくしたのかを良く分析して参考にせねばならない。

報道によると、リビアそのものが、元々国内が2分して争っていたという政治的状況の悪さもあり、国内が一致して大被害の救済に向かうという態勢が壊れている事や、いやそもそも形成されていない事も事故処理を有効に出来ない原因の1つとなっていると報告されている。

日本での自然災害の場合には、国内が安定している事もあって、ある地域での災害の発生後、例えば新潟地震の時など、北陸電力だけでなく、日本中の電力会社が即座に応援隊を派遣し、見事な位の短期間に復旧されている。しかし例外も生じる。

2024年1月1日16時10分に生じた震度7の能登地震に対しての日本の対応は、何よりも道路事情の限界によりその点不十分な事しか出来ていない。それは能登の特殊事情があるが、しかし準備不足である。

しかし能登という日本の地ですら、この惨状であるが、世界の多くの地ではリビアのケースのように自国の中での争いや、インフラの未整

備により、大きな自然災害の生じた時には、国際社会からの援助が不可欠となる。しかし、それもインフラの活用が難しいので、手遅れが生じる可能性が高いのが現実である。

今日の我々は、そうした事態を何とか食い止めたいと考えている善人の立場であるが、ここでは何の為に考察しているかと言えば、繰り返すがこの地球上の人間の数を人が人を殺すことなく減らす事が出来る可能性を論じている訳である。極めて従来の倫理観の下では、考えにくい事であるが、人類の地球上での存続を考えた時に、今日の人類の欲望の拡大としての大量生産、大量輸送、大量消費、大量廃棄の活動が、理性的に止められないとするならば、そうした地球上での人為的でない偶然に発生する事故、災害等を期待するのにも納得せざるを得ないかも知れない。これは否定している訳ではない。ここでは思考実験しているだけである。

その1つの例として、ハワイのマウイ島の山火事を取り上げて良く分析し、地球の未来の参考にすべきである。いずれにしても我々人類は、



マウイ島の山火事を取り上げて良く分析し、地球の未来の参考にすべきである

「原罪」なのだろうか？

3-5 より巨大な温暖化、寒冷化の波が

そうした中で、今日我々人類の生存環境である地球のより大きな周期を持つ気象条件が、今までの人為的な温暖化に対し一転して大きな自然現象としての寒冷化の波が2030年頃に到来するとの説がある。少なくとも気象学的には、そうした寒冷化説は傾聴に値するし、温暖化がそれにより打ち消される可能性はかなりの程度あるであろう。この説は、英国の大学から出されたが、全体としては受け入れられていないし、以前にも同様の説が流されたが生じなかった。

しかし忘れてはならぬ事は既にこの地球上では、人類の活動により、自然環境そのものが大きく傷ついている事である。下手をすると手術不能レベルの糖尿病に患っているとも表現出来るであろう。そこに厳しい寒冷化の波が押し寄せると、もっと大きく自然生態系の変化を招き、人類の生存にとつて、食糧危機やエネ

自らの「倫理観に基づいた理性の働き」によって、地球上での人類の生存を危うくする状況を止める事がかなり難しい状況になっている事を強く認識せねばならない。結果として自らの将来を、死を含めて考えねばならなくなっているのである。なら

とりの善意とは別に、社会全体としての存続を考えると、何とも矛盾した考えを採用する事を容認せざるを得ない事態となるのである。そもそも人間が言葉を探り、知恵を持ち、知識を生み、道具を作り、文明化する事への反対給付としての



経済成長一辺倒が地球を滅ぼす



大氷河期が訪れて、人類の殆どが絶滅する可能性も否定出来ない

ルギー危機による文明活動の大幅の低下といった厳しい状況が到来する可能性も単純には否定出来ない。

既に我々は縄文人の急速な減少の理由を理解している。それは縄文時代の終焉は小氷河期に近い寒冷化により演出され、食糧としての植物の成長の死滅的減退により迎えられたという事実を前述の如く経験してい

る。それと同様の事が生じる可能性が目の前に訪れつつあるのだ。

何ともおかしな感じで、この文章を書いていく。既にご理解のように、その寒冷化の到来は、我々人類の生存に対しての一種の危機なのであるが、地球上の人類の人口を人の手を煩わせないで、減少させる方法という事で、こうした可能性もある

と言う事で、ここで論じ筆を動かしている訳である。大自然の持つ脅威の前には、人間の欲望が砕かれていくという構図を本来否定的に捉えて対策を考えるべきなのに、むしろ今は、地球での生存の危機の自然自身による救済策のように論じている訳である。何とも皮肉であるし、寂しいとも感じるのだが、有力な解決策の1つであるとも記したくなるのである。まさに人の意志では、どうにもならない寂しさを日本の文化

では「寂び」を用いたのである。もう少し時間のスケールを大きくして論じると、いずれ再びこの地球上に大氷河期が訪れて、人類の殆どが絶滅する可能性も否定出来ない。

それを考えると、まさに地球上での人類の生存は諸行無常、変転流離であり、大自然の前にひとたまりもなく壊滅されてしまうものだと認識を諦観的に持たざるをえなくなってしまう。いや自らの意志とは離れた所で、それは人類に押し寄せてくるのだ。まさに「いと寂し」であり「いと悲し」である。

まさにそれが地球上での生命の生存の輪廻なのである。そうした巨大な輪廻の中で、ある時期人類が知己上の楽園を求めて必死で頑張つて生きていく。しかし、その頑張りによって、自然からの怒りを買って、自然の活動の中に人類の意志とは別に自然に吸い込まれていく事の繰り返し、それが地球上での人類の生存の必然的な姿なのかも知れない。何ともやり切れない感情が生まれる。

そう考えると、今の時代を精一杯自分なりの考え方をベースに努力していく事しか、ひとりひとりの人生

は無事になる。ある面で「インシャーラー(神の御意のまま)」であり「ケセラセラ」の人生なのである。そしてこの世はまさに「一時の浮世」であり、「虚空の世界」なのである。

こうした文章を循環的に書いていく事が、何とも大宇宙の中での一人の人としての存在に自らの思考が限界を感じてしまうのである。所詮、人知の能力は大自然の営みの前には逆らえないのだと。無力なのだ！

であるとすると、与えられたTPOに応じて、好きなようにやれば良いとの感になってしまふ。これを虚無というのであろうか。それとも哲学的ニヒリズムとも称するのだろうか！

しかし、時間は自らの意志で操作するのはベルクソンの時間のように、短い間隔での伸び縮みだけでなく、長い時間は確実、しかも正確に物理的時間を刻んで、迫ってくるのだ。どのように悩んでも答えの出ないことに悩んでいるのだ。まさにカントの『純粹理性批判』の指摘の中に、今の状況を加えるべきなのであろう。

(以下次号に続く)